

ときには、辛口

8

◆二十歳の女性作家



松本道介
Michisuke Matsumoto

最年少の芥川賞、二十歳の女性作家二人が

誕生したとあって受賞作を掲載した「文芸春秋」三月号は増刷をかさねて百二十万部にも達したという。

芥川賞といっても、いつもはあまり読まない私ながら今度ばかりは読んだし、意外なことに最後まで読みとおすことができた。「バカの壁」にならって言えば、最近の小説読者にもいろいろ壁があって、芥川賞小説といえども読めない人はいっぱいいる。金原ひとみさんの「蛇にピアス」とで、「スプリットタンツで知ってる？」という最初の一行を見ただけで拒否反応を示す人はずいぶんいるにちがいない。

ない。

私も保守的な老人の部類に入るからふつうならやめていただろう。しかし、これだけの話題作なのだからと我慢して読みはじめたら、文章はうまいし、話のつくりもたくみとあって、最後まですいすい読んでしまった。

すいすい読めた

「いい小説だった？」と問われれば、「うーん」と言っただけ、あとの言葉はなかなか出てこない。金原さんは小学校の四年生頃から登校拒否だったというから、すごい「学歴」だ。十五歳の頃書いた小説が少女の自傷行為を描

いたものだそうだし、「蛇にピアス」もセックスやアルコールは言うに及ばず「舌ピアス」に刺青、SMそして最後は人を殺すとか殺されるとかいった運びになる。これらすべてを体験しているのではないにしろ、小説に書けるくらいにあれこれ体験しているのだろうか、すごいなあと思う。二十歳でこんな小説を書いてしまったら、あとはどんな小説を書いていくんだろうと余計な心配もしたくなる。

一方綿矢りささんの「蹴りたい背中」の女子高生は舌にピアスもSMも知らない（むしろ私も知らないが）おとなしい生徒である。しかし学校の勉強にも部活（陸上競技）にも乗っていけないし、クラスのどのグループにも入れない余り者だから暇で暇で仕方がない。彼女の言葉で一番印象に残ったのは夏休みのことを「どこまでも続く暇の砂漠」と表現していることだった。

私など子供の頃から夏休みが待ち遠しくて仕方がなかったし、七十近くなった今でも夏休みへの憧れを持ち続けているが、今の学生には夏休みが暇すぎて苦痛という人もいるのだろうか。そうだとしたら本当に不幸な世代だと思う。

蹴りたい “自分の” 背中

表題の「蹴りたい背中」は流行語にもなっているそうだ。二十代の私の息子が読む前からうまいタイトルだと言って感心していた。人を憎むにしても正面から憎むことのできない気弱な世代の気持ちをぴたりと表現しているという。老人である私にはそんな気持ちがありよくわからないので、頭の中で想像するしかないが、私の想像の中では当の女子高生が蹴りたいのは決して見たことのない自分の背中でもあるような気がした。

むろん彼女が蹴りたいのは同級の男子の子、な川、典型的なオタクでスーパーモデルのオリチャンに夢中になっているな川の背中だが、当の女子高生も一人ぼっちであり、な川をひそかに軽蔑しつつみずから対する嫌悪も感じている。

彼女は夢中になれるものがない。すべてに冷めていて、世の中を底の底まで見通しているようなところがある。遠足のような学校行事でさえ、へあくびをかみ殺しながら毎日真面目に学校へ来ている生徒たちの息抜きのためにあるのではないと見ている。では

なんのためかといえはへ遠足の前日に、明日遠足あるらしいよ？ とりあえず行つとく？”というメールを、深夜のマクドナルドで受け取る彼らのためにあるんだ”そうだ。このくらい冷めた目で見てしまうと、すべての行事、すべての行動は、ルーティンである。退屈な流れ作業である……いやはや、いつたいていどうしてこんなに退屈な世の中になってしまったのだろうか。炯眼けいがんな綿矢さんもそこまでの問いは発していない。二十歳の綿矢さんにとって世の中は生まれた時から退屈だったから、別のかたちの世の中のことなど考えようがないにちがいない。

しかし私のような年寄りも考えることができる。退屈でなかった世の中を知っているからである。まさに五十年前になるが、綿矢さんと同じ年齢だったあの時期は誰しも貧しかったし、すべてが不便だった。畠といえは下肥のおいがした。クルマ、エアコン、テレビ、インターネット、ケータイ……なんにもなかった。ケータイどころか電話だってない家の方が多かった。学校へ行けば誰しもまずはじめに勉強していたし、先生はエラク見えた。見えただけではなく事実エラかつ

た。板書する字が生徒より下手な先生などいなかった。暗算とて若者より店番の小母さんの方がずっと速かった。若者は学校から帰れば、掃除や水汲みや薪割りなどの仕事がついて暇や退屈ではありえなかった。大人も子供もからだごと生きていたのである。

合わせ鏡

それにくらべて、今は便利で快適で安楽である代わり、人間はあまりからだを動かさず、インフルエンザ騒ぎの養鶏場の鶏に似てきたようだ。歩くどころか足を動かすことさえないままひたすら飼料を食べてチキンになって行く鶏たち、彼らは生きているというより生かされているのではなからうか。それゆえ何とも知れぬ欲求不満がたかまり、「蛇にピアス」の主人公のごとく舌ピアや刺青やSMに刺激を求める人も出てくる……。と考えば、若い二人の作家の小説は合わせ鏡のような関係にあるのだろう。いい小説なのかどうかは知らないが、若い読者にはぜひ一度読んでみてほしい。

(文学部教授)